

「ふじの山」は明治43年初出の文部省唱歌。富士山の歌といえば誰しも思い浮かべるメロディだが、作曲者は不詳。作詞の巖谷小波（いわや・さぎなみ）は東京の藩医の家柄に生まれ、日本の児童文学の礎を築いた。

全9曲からなる混声合唱のための組曲《蔵王》は昭和36年の作。「蔵王讃歌」はその第1曲で、遙かに連なる蔵王連峰の初夏を歌う。作詞の尾崎左永子は放送作家としても活躍した。佐藤眞は東京藝大出身の作曲家。

「廣島高師」とは広島高等師範学校の略称。その山岳部の歌として九州大の学生3人によって作られた《山男の歌》をもとに「坊がつる讃歌」として昭和53年、芹洋子の歌唱で発表された。芹洋子は同年この歌でNHK紅白にも出演した。

混声合唱のためのカンタータ《土の歌》は昭和37年の作。全9楽章からなり「大地讃頌」はその最後を飾る。合唱コンクールや卒業式などで歌われ、親しまれている。作詞の大木惇夫は戦中は愛国詩で知られたが、そのため戦後は不遇となった。

全5曲からなる合唱組曲《筑後川》は昭和43年の作で、「河口」はその第5曲。福岡県久留米市出身のブリヂストン2代目社長・石橋幹一郎が、義兄の作曲家・團伊玖磨に作曲を依頼して書かれた。作詞の丸山豊も福岡は八女の詩人。

「初恋」は歌曲集《啄木によせて歌える》の第1曲で、昭和13年の作。息をのむほどに美しい旋律を付けたのは、俳優の経歴も持つ作曲家・越谷達之助。越谷はオペラ歌手・三浦環の伴奏者をつとめ、本曲も三浦に捧げられた。

「砂山」は大正11年の作。新潟市の童謡音楽会に招かれた北原白秋は、音楽会のあと、散歩した寄居浜の荒々しい海や砂丘の眺めに感動し、この詞を書いた。作曲は多くの名曲を残した中山晋平。

昭和55年、アリス時代の谷村新司がソロとしてリリースした「昴」は、世界的なヒット曲となった（NHK紅白に初出場を果たしたのは7年後の昭和62年）。昴とはブレイダース星団の和名。

荒井由実の「ひこうき雲」は、昭和48年に発売されたシングルのB面曲。もとは雪村いづみのために書き下ろされたが、作者自身の歌唱で世に出た。言うまでもないが、荒井由実は松任谷由実の旧姓で、本曲が歌手デビューのきっかけとなった。

「小さな空」は武満徹による作詞作曲で、昭和37年の作。連続ラジオドラマ『ガン・キング』の主題歌として書かれた。子どもの頃の懐かしい感情に、ふと胸を突かれるような歌である。

「花」は、瀧廉太郎の歌曲集《四季》（全4曲）の第1曲で、日本における芸術歌曲を目指して書かれた。隅田川の穏やかな春を歌った、風情ある文語調の歌詞は、国

文学者で歌人でもあった武島羽衣（たけしま・はごろも）による。

團伊玖磨作曲の「**花の街**」は昭和 22 年の作。NHK のラジオ番組「婦人の時間」で放送され反響を呼んだ。荒廃した戦後の日本に、希望の光を灯すような江間章子による歌詞が心にしみる。

「**この道**」は、北原白秋作詞、山田耕筰作曲による昭和 2 年の童謡。前半（1・2 番）は白秋が晩年に訪れた北海道、後半（3・4 番）は白秋の実家がある九州・柳川の情景が織り込まれている。

三木露風の作詞、山田耕筰の作曲による、童謡「**赤とんぼ**」は昭和 2 年の作。昨今では赤とんぼを見かけることも少なくなったが、夕暮れと赤とんぼという情景が、聴く者を郷愁へと誘う。

「**早春賦**」は大正 2 年の作。文部省唱歌の傑作として長年愛唱されてきた。長野県中部の安曇野の初春の風景を描いた吉丸一昌の歌詞に、作曲家・中田章が作曲した。